

講義「文楽の歴史と大阪」 & 文楽鑑賞教室

2004年6月20日（日）12時半～16時

講師：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授

後藤静夫 氏

会場：国立文楽劇場

講義「文楽の歴史と大阪」

産学協同、文楽の制作現場から大学へ

3月まで国立文楽劇場で養成事業の責任者をしておりました。私が文楽に関わるようになったのは、1970年万博の年から、34年程文楽の制作という仕事をしておりました。簡単に言いますと、緞帳ラインを境にして、その内側です。特に舞台関係、それから出演者の人たちのお世話を全てする、要するに舞台の裏方の裏方です。日程を決めたり、配役を決めるといったことや、お稽古に立ち会って、色々意見を出したり、最後にお金の計算まで、文楽の制作現場に長年従事していたということで、今年4月より京都市立大学とのご縁をいただきました。

最近では、産学協同と称され、学問の世界も、文献だけの研究だけではなく、現場を知っていることも大事ではないかという傾向にあります。文楽の成り立ちは文献研究ありきの成り立ちではありません。文楽の現場は大夫や三味線、人形遣いや携っている人や観客も含めて成り立ってきたのです。ですから、現場を知らない学者さんだけが机上で研究を進めてもおのずと限界もあるでしょうから、ある意味きちんとした学問にもならないんじゃないか？ましてや、文楽も今も舞台上で演じられています。今も生きています。現状はどうなのか、そこは机上ではなく実際に携わらないと知りえないところで、30年余り現場にいた私が、大学に迎えられるというのも、たぶんそういう必要性があったんだろうと思います。

ジワジワ効く“文楽菌”

先程こちらに来る時に、地下鉄でおじさんがわざわざ連結部分のところに出てきて、あちらの扉を閉めて、こちらの扉を閉めて、真ん中を密室常態にしたので、飛び降りるのか？とびっくりしたんですが、やおらポケットからタバコを取り出してタバコを吸いはじめました。今、地下鉄は全部禁煙になってますから、吸うことができないのです。大阪の地下鉄で一番長い距離でも、所要時間は30分くらいしかないんですよ。「そんなにまでしてタバコ吸いたいのかなあ？中毒なのかなあ？」よく考えてみたら、私自身もかかっている中毒がありました。“文楽菌”というのがありまして、あんまり感染力は強くないんですけども、一旦感染しますとなかなかしつこい

菌です。ジワジワジワジワ効いてくるので、皆さんもそのうち文楽を見ないと今月はどうも落ち着かないというようなことになってくると思いますから、どうぞそれは覚悟しておいて下さい。

塾生の方は、先程からもご紹介がありましたように、いろんなものをご覧になったり勉強されたり、文楽ももう十数回ご覧になって、いろんな知識を今までにも実践的にずっと蓄積されてきたので、今日私がお話することは、特に目新しいことはないかもしれません。皆さんの方がご存知のこともあるかもしれませんので、まあ今日はそういったような知識を蓄積されてこられたものの再確認というくらいのつもりで、気楽にお聞き下さい。

先進国日本で生き続ける古典芸能“雅楽”

なぜ、文楽が大阪なのか？という話がありました。やはりそれについては、かなり振り返ってお話を始めましょう。

まずですね、日本という国は非常に珍しい国でして、ずっと古い、いわゆる古代に属するその時代に出来上がったような芸能から、中世の芸能、近世の芸能といったものが、これだけ発達した先進国・工業国といわれるような国でありながら、それらを非常に大事にして、それがいまだにきちんと伝えられています。しかもそれがただ単に先程申し上げたような文献の上に残っているだけではなくて、きちんとそれが現実に演じられているので、いろんな形で生でそれを拝見することができるという、そういう意味で非常に珍しい国なんですね。

古代の芸能で皆さんも機会があればご覧になれるものに、例えば雅楽というのがあります。で、雅楽というのは、中国の唐の時代に中国の宮廷音楽として整備された、もちろんそこには中国オリジナルのものだけではなくて、シルクロードから入ったもの、東南アジアから入ったものといういろんなその音楽を收拾選択して整備して唐の宮廷の音楽という風にしたものを、日本に輸入されたものと、その後日本でも日本風に整備して色々宮中の儀式の時に使ったもの、それらが雅楽なんですね。で、雅楽には音楽を専ら演奏する管弦という部分とそれに舞をつける舞楽という2つの部、そしてもう1つは輸入したものではなく、元来この日本でオリジナルに作られたもの、大和楽、今大和楽というと、ちょっと違うんですが、東遊びとかお神楽とかこういうものも全部宮中で整理してきちんと伝えていた訳ですね。

宮中・天王寺・奈良で生きる三方楽方の雅楽

そしてまあ平安時代にはそれが一度大整理が加えられた

り、あるいは応仁の乱で一時廃絶しかけたり、それを徳川時代になってからも一度復活させたり、いろんなことをしながら、そして近いところでは明治維新のときにそれまで一番中心なのは京都、政治の中心であった京都にまず中心となる楽所、つまり雅楽を伝承していくところ、それ以外に地元の大阪には天王寺に楽所がありました。それからもう1つは奈良の南部楽所というこの3つを三方楽所（サンポウガクソ）と言いますが、もちろんこれだけでなく巖島にあったり、いろんなところがありますが、主なものは、この三方楽所といわれているものがある。

それが明治維新、東京に首都が移る時に、一応全部東京と一緒に来なさいと言って、一遍連れられて行ってしまいうんですね。ところがこの中に、どうもやっぱり東京は私に水が合いませんと、もうリストラされてもいいですから帰りたいと言って帰って来ちゃった人が何人かいるんですね。で、その人達を中心になって、天王寺でもともと伝えていたものを又こちらでも中央とは別にやると、それが今雅亮会という形で残っておりますね。秋に朝日新聞社が後援して公演会をやっておりますが、そして同じように奈良に帰った人達があります。これが春日神社に残っていて、さかんに活動していますね。もう1つは、天理大学が雅楽に力を入れていますから、奈良では天理と春日大社とが、色々協力しあって元の南都楽所の伝統をつないでいると、もうですから千数百年という本当に長い歴史を保っている、これがちゃんと結婚式の場だけでなく、あるいはお正月の時だけでなくですね、様々な奈良の行事として、我々の周りで今でもそれらを体験することができるのです。

武家に保護された能楽

それから中世になりますと、皆さんよくご存知のお能です。能楽。これは能とそれから狂言という2つの部分がありますね。お能は、仮面劇と言ったらいいんでしょうかね。そして音楽劇ですね。それに対して狂言は台詞劇、そしてこれは基本的にはお面をつけません。で、動作と台詞が中心となります。それに対して、お能というのはお面をつけて音楽を奏しながら台詞というようなところは非常に少なく、むしろ音楽が主になっている。まあ楽劇という言い方をしたりしますが、これは室町時代に出来て、それからずっと足利幕府の人達、それからその次の太閤秀吉さん、そして徳川幕府にも庇護せられて武家社会の儀式用の音楽（式楽と言いますが）になったんですね。特に太閤さんという人は非常にお能が好きで、ご自分でも勿論演能されたんですが、すさまじいのがですね、彼は太閤一代記みたいなものをお能に作らせるんですね。それもわが世の春、栄耀栄華の出世物語を自分が演じるんですから、気分いいでしょうね。こんなに気分のいいことはないと思いますね。

まあたぶんそれにはまったんだろうと思いますけれど、十数曲太閤さんはお能を作ってますね。ところで、我々がお能を見ると必ず後ろに松の木をかけた壁を目にすることができ、鏡板といいますが、元々舞台に決してああいうものが備わっていたわけではないんです。最初は、もう全く何も書いてない舞台。それ以前はもちろん羽目板もないところでやっていた。それが、神さまが降りて来るといって神聖な松、春日大社の影向の松（ようごうのまつ）をモデルにし老松が描かれるようになりました。技術的にも、具体的なものが描かれてるとどうしてもその印象が舞台を左右してしまうことがあるのですが、松一本描いてあるだけですと、季節感もあんまり関係ないですし、そしてそれ自体がそんなに主張しませんしということで、非常に便利なので、松を描くということになったんですが、案外これも新しく、太閤さんの時代だろうという風に考えられますね。ですから、そういう中世に作られた能楽というものが、大事なのは宮中とか武家社会とかいうそれぞれある一定のパトロンの階層というものをもっているんですね。

式楽として武家に仕える家伝の能楽師

ですから食いつぱぐれが無いわけなんです。この日は、お祝いをするからそういう舞楽をやりなさい、管弦をなさい、宴会をやるからその時にバックで管弦を演奏しなさいということが、天皇さんなり宮中から命ぜられて、それをきっちり演ずれば生活の面倒はきちんと見てもらうことができるのです。宮内庁では、このシステムは今でも変わらないんですね。宮内庁に楽部というところがあって、その定員の中に入れてもうそれで一生保障されるわけですね。そういうパトロンというものがついたお能は、徳川幕府の江戸においてだけではなくて、各藩それぞれが能楽師をかかえて、そしてそれぞれの祈念すべき日には城中で演能するんですね。で、これを武家しか見れなかったかということ、案外そういうところは江戸時代は我々が考えるよりも優雅なものがあつたようです。「お能拝見」といって、時にはお城の門を開けて、一般の町人も一緒に白砂で見ることができる。というようなことがよく行われていたようです。

今お能は五流ございますね。金春流、未生流、観世流、金剛流、喜多流という5つの流派がありますけれども、その当時、江戸時代までは喜多流というのは無かったんですが、その中でも観世流が一番隆盛でした。全国参百諸侯の中でも70%くらいですかね？もっとかもしれないが、観世流が、まあほとんどだったのですが、中には加賀の金沢なんかは今でも金春流ですが、力がある藩には独自性がある。いずれにしてもお能というものを武家が式楽として保護するということが行われてきたので、能楽師は生活の心配なくそれに打ち込むことができました。ですから、お能にしても雅楽にしてもやはり必然的

に家で仕えていくということが、一番大事なことなんです。それをキチッと伝承していくということを必ず求められるわけです。基本的に芸能というものは家伝で繋いでいくということが前提になるんですね。

庶民の人気に支えられた歌舞伎・人形浄瑠璃

それに対して近世になりますと、このまず皆さんがこれからご覧頂く文楽という人形浄瑠璃ですね、それから歌舞伎。こういうものが芸能として出てくるわけですね。でも実はこの同じような伝統芸能といわれているものでも、お能と雅楽に比べて、歌舞伎・人形浄瑠璃というのは非常に違う要素を持っているんです。それはどこが違うか？と言いますと、この人形浄瑠璃・歌舞伎はだいたい1600年前後関ヶ原合戦の前後に、京都の四条河原で行われるようになったと。で、それは何がその場所で行わせるようになったかという、つまりこれはお客さんが特定の人ではないということなんです。河原に集まってくる庶民、特に京都という日本独特の都市ですね、その都市で庶民を相手に行う芸能として人形浄瑠璃や歌舞伎というものが発達したわけです。ですから一番大きく違うのは、人形浄瑠璃や歌舞伎というのは、お能や雅楽と違って、必ずそれがやれるっていう保障が無いんですね。つまり庶民の都市に集まってきて、商売をしたりあるいは職人さんとしていろんなものを作ったり、売ったりしているそういう人達の日々の稼ぎのうちから、余裕がある部分で自発的に見に行こうと、これだけ稼ぎがあるから必ず毎月見に行くとか毎回見に行くとかいうことでも無いわけなんです。お金がなければまず行かない。その次にお金に余裕があっても、おもしろくなければ行かない。興味がなければ行かない。ですから何の保障も無いわけなんです。先程申し上げたように雅楽とかお能っていうのは、ちゃんともう生活が保障されている。見てくれてもくれなくても、ちゃんと月々の手当てが出て年間きちっと生活ができるようになってるわけなんです。その代わり、言われた時にはきちんと言われた通りのことをやらなければいけないの、それをずっと家の芸として伝えていかなければいけない。そういう義務もあるわけなんです。それに比べますと、近世の都市の庶民芸能として登場した人形浄瑠璃や歌舞伎というのは、そういう保障が一切無い。誰からもやってちょうだいと言われてやっているわけじゃないんですね。やる者が勝手にやりますと言ってやるんです。ところが、それを見る側はせっかくおもしろそうなのをやってくれているけれど、お金が無いからやめとこう。或いはもう行った人に聞いたらつまんないって言うからやめとこうっていう世界なんです。ですから人形浄瑠璃や歌舞伎というのは、成立以来、雅楽や能に比べるとすごい真剣勝負を続けてるわけなんです。生きるか死ぬかの真剣勝負です。ですから昨日より今日、少しでもおもしろく

する。この前の公演よりも今回の公演はさらに話題を作るようなものを作る。新しい表現を作る。いろんな新しい演出をする。大道具を立派にして目を驚かす。あるいはいい声の大夫さんを発掘しておもしろい場面を語らせる、いろんなことを考えておかないとお客さんがついて来てくれないんですね。

目を引く出で立ち阿国の歌舞伎

歌舞伎踊りというものが、最初は出雲の阿国が来てやったと、これは何が人気を得たかという、出雲の阿国の歌舞伎ぶりなんです。歌舞伎と言うのは何かというと、今皆さん思い出していただくと、歌舞伎という字を思い出していただくと分かりますが、歌い舞う伎(わざ)。これは俳優のことで。ですから、ある俳優さんがその人の肉体的な条件をフルに活用して歌ったり踊ったりして楽しませる芸能っていうのが、歌舞伎ですよ。ですから歌舞伎というのは何よりも俳優さんの魅力がないといけないんですね。化粧して出てくると多少違うでしょうけど、でもやっぱり元が良くないとだめですよ。玉三郎さんなんて綺麗ですよ。それがきちっと化粧して鬘つけて綺麗な衣装をつけて、スッと立ったら、もう立っただけで、あぁいいなあ！と思うじゃないですか。そういう人じゃないと、やっぱりお客はつかないんですよ。ですから歌舞伎というのは、まず何よりも俳優の魅力がメインであることは、今でも同じです。猿之助さんのスーパー歌舞伎だったら見に行こうか！というのは、これは猿之助さんという人を中心としてその人の個性で仲間を集めて、そして自分たちが一番目立つような作品を作って目立つような演出をして舞台の上にクレーンまで引っ張り上げて宙を飛んで見せたりとかいうことをやる。他の人がやっても、あそこまで効果がないんですね。あるいは猿之助さん達だからおもしろい。ですから何をやるか、もちろんおもしろい三国志もいいし、日本武尊でもいいんだけど、そういうことよりも、猿之助さんだから見に行こうと、そういう要素が歌舞伎には強いんですね。そういうことを歌舞伎をやる人たちは一生懸命考える。そういう中で一番最初に阿国というのは目を引いたのは、歌舞伎ものだったからですね。

歌舞伎ものとはどういうものかという、かぶくというのはですね、漢字でかくと、かたむくですね？要するに何がかぶくかという、正当なものに対して傾いている、それがかぶくなんです。何かと言うと、正当なっていうと、服装で例えると、サラリーマンでいったら、背広着てネクタイしてっていうのが正当なですね。ま、ユニフォームみたいなものですが、それに対して最近はその格好だけでなくいいから、カジュアルな格好で出てくる日を作りましょうと、金曜はカジュアルデーって言うたりしますよね。それまでそんなことしたことない人は、戸惑ってどんな格好していったらいいのだ

ろう？で、さんざん考えたあげく、ネクタイ外しただけでたいして変わらないという格好で来る人がいれば、あの人があんなことを！と思うようなびっくりするような格好をしてくる人もいます。そのびっくりするような格好、これがかぶっているわけなんですね。そういうその通常の路線からちょっと外れたということが、それがかぶくということなんですね。

お国歌舞伎・若衆歌舞伎廃止から、野郎歌舞伎へ

ですから出雲の阿国というのは、その当時の風俗から見ると、かなり目立った変わった服装やら演技をしていたようです。例えば、今残されている絵なんかですと、若衆なみに、男のようなデザインをして、そして刀をつけて胸には大きな十字架のペンダントを、もうそろそろキリシタンは禁令になるころですね。危ない、でもそれが非常にやっぱり目立つわけですね。で、綺麗な女性がまづ少年のような格好をするということ自体怪しいですよ。しかもそろそろ禁教になるようなキリシタンを表すような十字架を堂々とつけて、そういったようなことは非常にかぶっているわけですね。そういう服装とか演技とかいうものをその当時は踊りを行うということで、歌舞伎踊りという名称をつけられるんですね。そしてそれを京都の遊女たちが集団で真似をして遊女歌舞伎が流行りましたが、当然これでは風俗が乱れるからといって禁止されました。

そこで、次に「若衆歌舞伎」という、まだ成人前の非常に若い美しい少年達で組織した何か今でもある雰囲気ですよ。そういうまあ芸能団を作って、それでいろんな物真似させました。-当時は戦国の時代の威風が残っていて、男色が非常に流行っていましたから、これも当然危ないということで禁じられてしまいました。

そこで、次は野郎歌舞伎という名前からしてなんだかムサイですよ。それはどう違うかということ、美女でも美少年でもないのですから、何かやろうと思ったときに若衆たちと同じようなことをやったら気持ち悪いだけですよ。野郎ばかり集まっても、なかなか綺麗なあとかいうわけにはいかない、そうなる演技力というものが求められてくるということで、歌舞伎はだんだん踊りや物真似の世界から演劇という要素を強めていきます

当時、実は歌舞伎の場合は初めきちんとした台本が無かったんですね。踊りやら物真似でしたら、無くていいわけなんですね。そして役者を見に来るわけですから、特に何もなくてもちょっとポーズをとって見せたらそれで充分みんな満足するっていう世界から始まっているわけですから、でも若衆歌舞伎から野郎歌舞伎になってきたら、それでは客は寄り付かない。従ってそうなりますと、台本が必要になってくるということで、作家も現れます。

牛若丸との浄瑠璃姫の恋物語を語る人々

実は、人形芝居はきちんと台本を持たないと出来ない芸能ですから、歌舞伎よりも先に台本があったので、歌舞伎も台本をもとにどんどん演劇性を高めていくことになりました。人形浄瑠璃というのは、最初に浄瑠璃という音楽があったんですね。この浄瑠璃という音楽は、やはり早く中世室町時代の中頃過ぎには出来ていたはずなんですが、浄瑠璃という言葉自体は音楽を表すものではありませんね。浄瑠璃という言葉は、元々仏教用語で「清らかな宝石」という意味ですから、例えば水晶ですとかね、そういったようなことなんですけど。で、これは阿弥陀の住んでいる世界を浄瑠璃世界と言われてるのです。三河にいた長者に子供が無いので、お祈りしたところ、一人の女の子を授かったので、阿弥陀の願で授けられたので、浄瑠璃姫と名づけられました。美しく成長した浄瑠璃姫と東北へ下っていく牛若丸が恋仲になってそういう恋物語が作られたのが、浄瑠璃姫物語ですね。そしてその浄瑠璃姫物語を琵琶の伴奏で琵琶法師たちが語るようになって、それがだんだん非常に評判になって浄瑠璃姫が出なくても浄瑠璃物語というようになって、いつのまにか浄瑠璃という音楽の名前になったそうです。琵琶法師たちの表の芸は平家物語を語ることだったので、平家物語ばかり語っていてもつまらないので何か変わったのはないのか？と言われると浄瑠璃姫も吟じたんですね。そしたらそっちのほうで有名になっていつのまにか平家物語は捨てて浄瑠璃ばかりやるようになってゆく浄瑠璃語りという人達が成立するんですね。

西宮戎の功德を宣伝してまわる人形遣い集団

そしてその浄瑠璃語りとは別に、古代からいる放浪の芸能者たちがいたんですが、この人達の中で男性は例えば手品のようなことをやったり、あるいはジャグラーみたいにいろんな小さな剣をポンポン投げ上げたりですとかね、あるいは高い竿の上に乗るなど、いろんな軽業のようなこともやったし、その中で人形をつかうという芸があったんですね。その人形を非常に上手に使う人の一団が西宮神社に隷属していたんです。これは古代では正式の人民というのは、きちんと田んぼを耕して、そしてお米を作りきちっと租税として国家に治めるということをする人達のことだったので、それも大変で、税金が高く、生活ができていない。もう少し楽に生活したいなあと思う人達が、もう私達は正式な人民と認めてくれなくていいとドロップアウトしてしまう訳です。でどうするかっていうと、非常に有力な貴族の荘園の中に逃げ込んだり、それから大きな神社だとか寺に逃げ込んだんですね。すいません、何でもやりますから置いて下さいって置いてもらった人達、そういう人達がだんだんそ

ういう芸能を身につけて暮らすようになってきます。あるいは先程言いましたように、もともと流浪していた芸能者たちがそういうところに住み着いていく。ですから、今でも西宮に産所町という町がありますけれども、これがもともと西宮神社の所領内で、産所というのは、本所に対して産所というところで、つまりあまり生産性の高くない荒野みたいなところですね。ですからそこは住んでもいいよ、でも一生懸命耕してもあんまりものはできないよという土地なのですが、だからどうやって生活するかというと、戎神社のいろんな祭礼の時には、神様の乗った神輿を担ぎなさいとか、普段から神社の境内のお掃除をなささいとか、そういう雑用をやるんですね。で、そのうちに、戎神の乗った神輿をお祭りの時に担ぐことを、専門の職業にしていきました。戎かきといわれているんです。その人達は、普段は非常に人形を使うことが上手だったのですが、戎さんの神輿は毎日かつぐ必要はないわけで、お祭りの時に担ぐだけです。神様も、毎日あっちこち担がれていても疲れますから、普段はやらないんですね。で、普段閑だからどうするかって言うと、逆に首からかけた小さな箱の中に人形を入れて、その西宮の戎神社の功德を宣伝して回るんですね。それを主な仕事としてあっちこちいって、そのうちにそれがお能の人形を使うようになるんですね。能人形を使って、それで非常にその中で上手な人達が出てくるのですが、特に西宮の戎かきと言われる人達はそういう技能が優れていたそうです。ですから、彼らがそういうものを作って、宮中から見せにおいでなさいと言われて見せに行く、或いは、自分の方から有力な貴族のところに見せに行くというようなことをやって、だんだんに都とのつながりが出てくる。ただ、貴族や天皇さんに見せるだけでなく、せっかく来たんだから普通の人にも見てもらうようにしようというって、お能の所作をして見せたり、そのうちに浄瑠璃語りたちと一緒にあって、浄瑠璃操りということを始めたのが、四条河原で、1600年前後といわれているんですね。

京都で発祥・江戸へ進出し撤退した人形浄瑠璃

ですから、人形浄瑠璃というのは京都が発祥地となり、だんだんと発達していきますと、特に江戸時代大きく発展してくるんですね。なぜかといいますと、江戸時代では、徳川家康が江戸に開城して街づくりをどんどんやっている時なんですね。江戸はもともとはほんとに小さな漁村でした。大田道灌が作った小さなお城がある程度で、その周りには全くの荒地だったところに徳川家康たちが入って、沢山の三河からの人間を連れてきて街づくりをした。ですから建設ラッシュなんですね。土木建築の作業員・技術者が地方からたくさん集まるんですね。つまり男ばっかりの世界なんですね。江戸の初期というのは、たぶん江戸の町では男性と女性の比率が8:2くらいだと

思います。建設ラッシュなので、男手が足りないので、天気さえよければ、いくらでも仕事があるんですね。こっちの屋敷ができたなら、じゃあ隣に行こうか！と別の大名の屋敷を作らなきゃいけないとか埋め立てしなきゃいけないとか、神社も作らなきゃいけない、お寺も作らなきゃいけないというようなことで、仕事はいくらでもある。そういう職人達は宵越の銭を持たないという気質ができるのですが、そういう1日肉体労働をしてる人達に当時京都で流行っていたような優雅な能だとか謡いだとかいうものは合わないんですね。手っ取り早く結果の分かる楽しいものを求めるわけですね。そういう時には人形芝居というのは非常に便利なんですね。人間と違って、もともと木やら布から出来ているので、立ち回りのチャンバラをやらせても、バサッと切ったら手がポーンと飛ぶ、首を引っっこ抜くとか、ズボッと人間を投げつけるとかそういうことを人形だったらいくらでも簡単にできるんですね。人間ではそれはなかなかできない。ですから人形というのはそういうところが非常に便利で、終わったら又繋いで次に同じものを使えるし、しかも何回もやり直せるんですね。当然人形ですから人間とは異なり扱いが荒いと文句は言わないし、お金がかからないというようなことで、新興の建設途中の江戸という新興都市に住んでいる人達や、男性の労働者たち向けには人形芝居は非常にてっとり早く楽しめる芸能でした。ですから京都の四条河原で作り上げられた人形浄瑠璃はかなり早い時期に江戸へ移って、江戸で非常に盛んになるんですが、江戸の名物は「火事と喧嘩は江戸の花」といわれるくらいに、関西とは異なり瓦葺の屋根なんていうのはほとんどない、江戸の市中でも茅葺の屋根の大名屋敷が普通だったと言われています。だから、火事ばかり起こるんですね。作ったそばからどんどん焼ける。で、その大名のお屋敷は又作ればいいんですが、芝居小屋もどんどん焼けるんですね。いくら人形芝居が安くあがるというって、芝居を作るっていうのは、初期投資が大変なんですね。つまりお客さんが沢山来て、何日も何日も来てくれて、はじめて元がとれるんで、始める時には一方的につきこむだけなんですね。沢山お金をつぎこむけど、数日で火が出て焼けおちたり、隣から燃えてきて駄目になったというのでは、もう泣くに泣けないわけですね。それでも当初はやり直しているのですが、火事が度重なるとうちこれは無理だということになってきます。1657年の振袖火事という寺小姓の美少年に娘が思いを寄せて仕立てた振袖を握り締めながら亡くなった後、その振袖と関わった娘たちが次々と亡くなったので、本妙寺で供養する為火をつけたところ燃えながら高く舞い上がり寺の塔から出火。江戸の人口35万人余りのうち10万8千人が焼死するという大惨事となりました。その振袖火事を境に人形浄瑠璃の関係者は江戸に見切りをつけて、大阪や京都に戻って活躍し、人形浄瑠璃の本場になってきます。

浄瑠璃物語の12段から6段で構成した古浄瑠璃

やっと大阪で何故文楽が開花したのかという、本題にたどり着きましたね。長かったですね。(笑) まあそういう芸能の流れを通じて、人形芝居というのができました。そしてその中で貞享元年 1684 年に竹本義太夫さんが道頓堀に竹本座をつくるということになるわけですね。義大夫はそれまで農耕浄瑠璃というものはたくさんあったんですね。一人一流一人一派といって、みんな自分の名前に太夫をつけて呼ぶようなたくさん浄瑠璃があったのが、古浄瑠璃とされています。人形芝居の浄瑠璃だったわけですが、この浄瑠璃というのは先程言いました浄瑠璃姫物語から発祥しています。浄瑠璃姫物語というのは12段で書かれていたんですね。でも12段というのは非常に長いんです。ですから12段の半分ずつに区切ってやろうということ考えた知恵者がいるんですね。そのうち特に前半の六段というのが非常に変化もあっておもしろいので、だんだん浄瑠璃というのは六段だけやるようになりました。だから古浄瑠璃の時代にはだいたい六段だったんですね。ところが井上播磨掾というこれはまあ竹本義太夫さんの精神的な師匠ですね。直接習ったことはたぶんないと思うんですが、孫弟子にあたるんですが、その井上播磨掾さんやそのちょっと後で出てきた義太夫とかなりだぶる時代の人に宇治加賀掾という京都の名人がいたんですが、この2人はお能のやり方を取り入れて浄瑠璃を五段で作るということ考えた人たちなんですね。

5段に完全定着させた近松と義太夫

その五段というのを完全に定着させるのが近松門左衛門と義太夫なんですね。それから能の五段というのは、もう1つ前の雅楽議論を取り入れてるんですね。この辺が日本の芸能の特徴なんですね。ものが残っているだけでなく、それぞれの良いところを取り入れて繋げていくようになります。つまり、雅楽の文学的な議論で一番大事な序破急という理論がありますが、最初にゆっくりやって、非常に躍動的になって、最後に急テンポで終わりにもっていくという序破急、これはもう今の日本の芸能全て序破急を考えないとできませんね。それから音楽でもそうですし、あるいは文学だって同様です。日本の文化は序破急という理論を取り入れて成り立っているようなところがあるんです。この3段階の序破急を5段階にしたのが、お能なんですね。これは観阿弥世阿弥がそれをやるわけですが、どうするかというと、まず破の序、破の破、そして最後に破の急これで5段になるわけですね。この5段階の考え方を目に見える形でやったのが、お能の1日の正式の番組なんですね。お能の1日の正式な番組は朝から、まず最初に脇能という儀式的な能をやって、その次に狂言と一番やって、そしてその次に修羅

物という侍たちが主に活躍するうがったものですね。そしてそれが終わると狂言を入れて、その次は蔓物という女性が活躍するもの、そして又狂言をやってそれから次は雑能という、それから狂言をやって、最後に祝言。そういう風に性格の異なった5つのお能を組み合わせるというのが1日の正式な番組だったんですね。ですからこの5段と目に見える形で定着をさせたお能の考え方をとり入れたのが浄瑠璃の5段の骨子なんです。ですから初期の頃は一段終わる度に、幕外で狂言に相当するのろまとかそろまという滑稽な人形劇をやっていたんですね。で、これが一度今でも佐渡に残っていますね。のろま人形、きのすけ人形とかいうおもしろい人形が残っています。お地蔵さんを背負ってとかね。そういうのがある。それがのろま狂言、一幕終わるとのろまが出てきて、又一幕終わると、という風にやっていたんですが、それは非常に間が抜けちゃうんですね。それで五段に完成させたのはのろまそろまが持っている娯楽性というかそういう滑稽な部分を5段の中にとりいれてしまう。ちゃりばという中に取り入れる。そのことで、色々幕の外で違う性格ののろまをやらなくても5段そのもので充分にお客さんを退屈させない。そしてその雰囲気途切れしない。そういう作劇戯曲後世を作り上げた、それが浄瑠璃の5段の意味なんですね。そういう形で雅楽から能楽そして人形浄瑠璃・歌舞伎さらにはその後の邦楽舞踊、今の歌だとか文学に至るまでそのまま取り入れられて日本の文化というものが作り上げられています。

道頓堀で火花を散らした竹本義太夫 VS 宇治加賀掾

そういう手腕を持って貞享元年に竹本義太夫が道頓堀に竹本座というのを作ります。そうするとその時に焦った人がいるんですね。京都の宇治加賀掾ですね。これが実は竹本義太夫は竹本座を作る前、ほぼ10年近く前に一時京都の宇治加賀掾の一座と一緒に出たことがあるんですね。ですから宇治加賀掾は彼にとっては師匠筋にあたるんですね。ところがその宇治加賀掾の座に出ていて、加賀掾の脇を務めていた時に非常に人気が出た。これは宇治加賀掾の芸風というのは非常に優美で美しい繊細な京都人好みの芸だったようなんですね。ところが、それに対して義太夫さんは若かったので、これは俺が優れているから京都のお客は喜んで、もう別に宇治加賀掾のところにいることはないと思って、自分で独立して清水義太夫と名乗って四条河原で芝居をやるんです。ところが、今言ったようにそうじゃないんです。世間は甘くないんです。誰も一人として義太夫を聞きに来なかったんですね。もう簡単に座はつぶれちゃうんです。それでこれはあかん！というんで中国筋へ修行に行つて宮島で数年修行をして、その間にありとあらゆる音楽から民間芸能から優れていて取り入れられるものはみんな取り入れるんですね。ですから義太夫節には、他の浄瑠璃の

いいところがどんどん入っている、謡いも入っている平家振りも入ってるそれから馬子歌から船頭の歌までみんな入ってる。それがただ入っているだけでなく、それぞれその戯曲の中で一番効果的に使えるものをそういうところに取り入れてるんです。ですから、義太夫節というのは、当時の他の浄瑠璃に比べて非常におもしろくなったんですね。それで、貞享元年に大阪の道頓堀で竹本座を旗揚げして人形芝居を始めたら大ヒットした。その噂を聞いた宇治加賀掾は、（これはえらいこっちゃ。俺のところにて修行してた小僧がなんか今度はえらく羽振りがいい、ほっとくと自分の人気をとられちゃう）と言って慌てたわけですね。これは今のうちに早めに潰しておいたほうがいいということで、わざわざ京都から大阪に来たんですね。竹本座の近くにたまたま空いていた歌舞伎芝居の小屋の権利を借りて、そこでそれを大阪の地座ということにして興行をぶつけたわけなんですね。もうすでに宇治加賀掾は名声のある人ですから、これはもうお客さんも注目しています。

井原西鶴を起用した宇治加賀掾

その時にしかも用意周到に宇治加賀掾は当時大阪で非常に評判の良かった井原西鶴にわざわざ暦（こよみ）という浄瑠璃を書き下ろさせたんですね。で、それが 1685 年・貞享 2 年の正月です。で、それに対して義太夫の方は、まだ駆け出しですから座付き作者を雇える程の力はないんですね。で、どうしたかというと先程言いました大師匠に当たる井上播磨掾が語っていた作品の一番最後のところをちょっと変えて「賢女の手習並に新暦」（けんじょのてならい ならびにしんごよみ）を上演しました。ところがこの大阪のお客さんは新しい浄瑠璃である竹本義太夫の方に軍配をあげたんですね。義太夫に人気が集まったんです。こういう場合、興行界では、今は前売り券を事前に販売しているので、入りが悪いから 3 日で閉めるっていうわけにはいかないんです。3 日間位ならまだましなのですが、千秋楽まで 20 日分前売り券を売ったら、嫌でも 20 日目までやらなきゃいけない。それはもう文楽劇場も苦しいところですから、その辺は覚えておいて下さい。つまり当時は、前売り券を販売していなかったのが、当日券だけなんですね。ですから客の入りが悪かったら、早く止めたほうが損害が少ない。やればやるだけ、今だったら電気代がかかるとか、人件費がかかるとか、経費がかかるというのは昔も同じです。ですから、宇治加賀掾はこりゃいかんと思って、1 週間か 10 日くらいでさっさと止めちゃったんです。そのかわり、もう一回西鶴に頼んで、もう 1 つおもしろいの書いてくれと言って、「凱陣八島」（かいじんやしま）という戯曲を書かせるんですね。

近松門左衛門を起用した義太夫

それに対して今度は義太夫の方はちょっと余裕が出来たし、この前は古いのを手直しただけだったので、同じ手口でが通用しない、自分の方も腹を据えて、当時京都にいて南座の近くの一座の座付き作者であった近松門左衛門に頼んで、新作を書き下ろしてもらおうんですね。それが「出世景清」という作品ですね。それを 3 月にお互いぶつけあって出した。そしたら今度は加賀掾の方がかなり優勢になってきたんです。ところがここから先は不思議だとしか言いようがないんですが、宇治加賀掾の楽屋から出火するのです。燃えてしまうのです。宇治加賀掾は止めを刺されてしまうのです。自分の時代は終わったんだと、もう大阪は義太夫に渡そうということで、京都へ引っ込んでしまって、二度と大阪に戻りませんでした。その後、彼は京都ではやはり人気がありましたので、それからしばらく京都で公演して古浄瑠璃の最後のスターという座を保ったまま息を引き取りました。片や、義太夫は飛ぶ鳥を落とす勢いになってくるんですね。どんどん勢力を増してゆきます。歴史に **if (もし)** ということは言っちゃいけないというんですが、なんか出来すぎてるとなと思いますよね。義太夫がお金かけて近松門左衛門に書いてもらって負けられへんなどという時に、都合よく相手の座から火が出るかね？という気がしますが、したんでしょう。天も味方をしたというしかないですね。じゃあ、もともとそのまま西鶴が浄瑠璃書いて義太夫が引っ込んだじゃったかという、そうじゃないでしょうね。やはり義太夫節というのは非常におもしろいものなので、その時にたまたま近松門左衛門が書いたものが、ヒットしなくても、いずれは近松門左衛門と竹本義太夫というコンビでやはり義太夫節が主流になる。それが多少 2 年や 3 年遅れても結局はそうなったんでしょうから、まあ出火したのは、宇治加賀掾には非常に気の毒だったけど、やはり 1 つの流れだったと思わなきゃ仕方ないでしょう・・・。というようなことがあって義太夫節というのは世の中に非常に広まっていく。

曾根崎心中で文楽作品で庶民が主人公の世話物登場

他にもまだまだたくさんの人形浄瑠璃があったのがどんどん義太夫節になってしまった。で、まあかろうじて今でも（ぶんや節）の人形芝居というのが九州とか佐渡の方にちょっと残っていますが、もうほとんどないです。今日日本中で演じられている人形芝居は義太夫節で 3 人使いでというのがほとんどだという状況になるんですね。でそういったようなことをやって義太夫節による人形芝居というのが、日本の人形芝居の主流になっていくと、そういう中でも元禄 16 年が 1 つの大事な時期なのかなと思います。それは元禄 16 年というのが近松門左衛門がそれまで浄瑠璃の時代にはなかった世話物というのを作るんで

すね。それまでの浄瑠璃というのは、全て今でいう時代物だったんですね。神代の昔から江戸時代直前の、つまり安土桃山時代までの公家やら武家やらあるいは高位の坊さんといった支配層の人達が活躍する作品、それが時代物なんですが、そういうものしかなかった浄瑠璃の世界に、はじめて自分達が今生きている同時代のしかも町人というまったく今まで歴史の表に出てこなかった庶民を主人公にしたニュース種の世界を、きちんとした戯曲に仕立てた、それが世話物ですね。そういう画期的なことをやった。ただもちろんその世話物らしいものというのは、人形浄瑠璃ではその時が初めてですけれども、それ以前上方の歌舞伎界では世話物的な世界は成立していました。そして先ほども申しましたように近松門左衛門と言う人は京都で歌舞伎作家をしていましたから、世話というものについては十分に手法を身につけていました。ですから元禄 16 年曾根崎の森で心中をしたお初と徳兵衛の話のすぐ後に事件後 1 ヶ月で人形浄瑠璃の舞台に上げることができた。近年の研究では、どうも歌舞伎の方がそれよりも 1~2 週間早く上演をされてるようですね。歌舞伎での評判を狙って人形浄瑠璃の方でも曾根崎心中を書いたということになるようです。いずれにしてもそれまでにない性格の新しい世話物というジャンルをここで作り上げた、それが元禄 16 年。

道頓堀の西に位置した竹本座と、東の豊竹座

同時にもう 1 つ注目しなければならないのは、義太夫節の人形芝居は本家の竹本座がそれまでは道頓堀に 1 つだけだったんですが、竹本義太夫の弟子で采女とっていた人が豊竹若太夫とって同じ道頓堀の東側に豊竹座とていうのを作る。そしてそれ以降時代物の正当な語りを中心に据えた竹本座と非常に艶麗で優美で音楽性の高い美しい局を特徴とする豊竹座、この二つが競合するようになるんですね。そしてこの 2 つの座がお互いにその特色を持ちながら、同じ題材の作品をぶつけたり、あるいはそれぞれの演出の仕方を特徴的にする名作を発表しあうことで、お互いに人形浄瑠璃というものをどんどん盛んにしていったって、その 2 つの座が競い合って、歌舞伎なきものとして言われるくらい人形浄瑠璃が盛んになったんですね。その元が元禄 16 年 1703 年と思って頂いたらいいです。ところが、少し考えると非常に不思議なのが、邦楽といわれているのは、古浄瑠璃のところを見てもいくらか分かるんですが、ほとんど分派活動の繰り返しなんです。もうある 1 つの音楽から弟子が独立をしてその理由は作って、又その弟子が独立してと、元が 1 つでもどんどん枝分かれをして、流派が家元が出てくる。それが日本の音楽やら舞踊やらの 1 つの特徴。そういうエネルギーをそれぞれの芸術に転嫁していったという風にいえなくもないと思います。

ところが、義太夫節というのは、それが一切ないんで

すね。ですけれども、竹本座の演奏と豊竹座の演奏は非常にお互いはっきりした特徴があるんですね。逆に言えば義太夫節と片方がいうんならば、若太夫節として全く別のものとして独立してもいいくらいに違う特徴をもった音楽なんです。で、あるいは、若太夫豊竹の系統から出てくる駒太夫、この人の音楽的な特徴は、下の義太夫から考えても相当に異質なものなんです。にもかかわらず、皆自分達は義太夫節であると、今でもそうなんです。ですから現代の文楽でも浄瑠璃の演奏として大きな 2 つの流れとして西風東風という言い方をしますが、竹本座が道頓堀の西の方であって、前の浪速座のあたりで、豊竹座が道頓堀の東の方であって、東映のあたりに小屋がありましたので、竹本座の芸風のことを西風、豊竹座の芸風を東風とはっきりと特徴と演奏を分けてやれというんですね。色々事情があって、1 つの浄瑠璃の中で、前半を西風でやって後半を東風でやる。今皆さん今からご覧になれる菅原天神手習鑑の寺子屋では、最初松丸丸達が籠にゆられてたちかえる。ここまでを西風でやれと指定がある。それから東風でやれと 1 段の中で西風東風を積み合わせてやる。その方が演劇的音楽的にももしろいからなんです。それにしても今でもここまでは西風ここからは東風と分けてやりなさいと、それがきちんと守られている。それくらい違うものなんです。にもかかわらずどちらも義太夫節と言ってる。

いくつもの危機を乗り越えてきた義太夫節

それはたぶん元祖義太夫さんに対する弟子やら後輩やらのものすごい尊敬の念が非常に強いからだと思います。それは 1 つは例えば今でも因協会（ちなみきょうかい）というのがあります。これは人形浄瑠璃を生業にしている人は必ずそこに登録しなきゃいけないんですが、ここに登録していない人は舞台に立てない。あるいは人を教えちゃいけないというそういうものなんです。一時そこに 500 人程も登録していた時代があるんですが、今は文楽の人たちと女性の人達と極少数の素人の人達を教えている人と全部で 100 人程になってしまいましたが、実はこの因協会の元は竹本義太夫在世中に始まっているんですね。これは竹本義太夫という人は非常に信心深い人でお伊勢さんを信仰していた。ですから始めの頃は自分で年に一度お伊勢さん参りをしていたんですが、だんだん忙しくなるとそれができなくなって代参させるんですね。そして代参した人が帰ってきて無事に行って御礼を頂きましたというのを皆集まって報告をする会をもったんですね。それが 12 月 25 日なんですね。因講という今でも因協会の総会は 12 月 25 日の午前中に必ずやる。三百数十年ずっと続けているという、そういう世界です。で、いずれにしてもそれくらい義太夫さんに対する信仰的な信頼尊敬の念というのが、そこまで違う音楽的演劇的な特徴を持つて人達までも自分達は義太夫節であるという

意識を持たせて、今まで分派活動を起こすことなく、ずつつながって今にまで及んでいるというものが、義太夫節であるといえると思います。で、もちろん義太夫節はそんな風にずっと平安できたかというそうではなく、途中で「説教讃語座」事件というのがありまして、「説教讃語座」という逢坂山の蟬丸神社（蟬丸というのは琵琶の名士だったことから）が音曲を司るということを宮中から許されたと主張して、義太夫節の連中も全部「説教讃語座」の蟬丸神社のもとにはいれという難癖をつけられた時、他の大阪にあった人形芝居の人達は（ヘイ分かりました）といって従ったのですが、文楽座だけが頑としてそれを拒否しました。そして最初は東町奉行所に訴え出てこんな難癖をつけられてますと言いますと、残念なことに東町奉行所はそれは蟬丸神社が正しいから言うことを聞けという結論を出されたので、慌てて駄目で元々だからと、西町奉行所に訴え出たら、色々調べて、結果文楽の言ってる方が正しい、これは蟬丸神社の方は一般論を言ってるだけで、そんな支配権は無いということで、危うく難を逃れました。そのお陰でたくさんある人形芝居の中で文楽座がものすごく力を持つようになったというようなことがあるんですね。ただ、非常に危なかったんです。それともう1つは例えば曾根崎心中を発表して非常に大当たりをしたお陰で、それまで3年以上何十年かの芝居の大赤字をやっと取り戻した。あるいは国姓爺合戦を17ヶ月3年越しで出して、経営が安定しました。逆に言えば、人形芝居というのはそのくらいずっと何年か赤字続きで、たまにぽっと黒字を出すという、いつも危機を経験してるんですね。ですから今も危機続きの中ですが、先程ご紹介がありましたように平成15年11月7日にユネスコにより世界無形遺産に指定を頂いて、この正月くらいからお客さんも上向いていますけれども、でも決して安心ができない。いくつもの荒波を乗り越えて、文楽が大阪で開花し、今まで300年以上延々と続いてきたという話をしました。皆さんがよくご存知のことの、今日はおさらいでございました。そんなことをちょっと思い出しながら、本日の演目、最後までお楽しみ頂ければと思います。

テープお越し 塾生 林紀公子さん

文楽鑑賞教室

伊達娘恋匪緋鹿子 火の見櫓の段

- 恋人に会いたい一心で放火をし火形となった娘、お七の事件は多くの文芸作品を生みました。安永2年（1773）大阪北堀江の芝居で初演された本作は、そのお七を扱った決定版といえるものです。
- 火の見櫓を登る場面では、人形遣いの姿が見えないで、人形がひとりで登って行くように見える工夫がされています。

菅原伝授手習鑑

- 菅原伝授の大宰府左遷に、梅王丸、松王丸、桜丸の三つ子の兄弟をからませ、雄大なスケールで展開する時代物の傑作。今回は最も有名な四段目、松王丸とその子、小太郎の死に別れ、“首実検”という緊張感高まる舞台を紹介。

■ 寺入りの段

帝位を狙う左大臣藤原時平は、邪魔者の右大臣菅丞相を大宰府に配流しただけでなく、嫡子菅秀才の命も狙っています。武部源蔵は菅丞相から勘当を受けたものの、その技量を見込まれて筆法の伝授を受け、芹生の里で寺子屋を営んでいます。源蔵の留守に、村外れに住むという女が男の子を連れてきます。

■ 寺子屋の段

源蔵夫婦は、菅秀才を匿っていましたが、時平の知るところとなり、首を討てと命じられます。思案に余った源蔵は今日寺子屋入りした小太郎を身代わりにする事を決意します。やがて検使役の松王丸がやってきます。秀才の顔を知っているはずの松王丸ですが、小太郎のその首を秀才の首と認めて帰るのでした。源蔵夫婦はほっとしたのもつかの間、小太郎を迎えに女が戻ってきます。源蔵と女が争うところへ現れた松王丸は、「倅はお役にたった」と女に告げます。女は松王丸の妻千代で、小太郎は二人の子供だったのです。松王丸は菅丞相の恩を受けながら、敵の時平の家来になった身の不運を嘆き、恩に報いるのはこの時と、息子小太郎を身代わりにするため、寺子屋入りさせたのでした。そして、松王丸が救い出した御台所と秀才を引き合わせ、秀才母子の対面も叶った松王丸は、妻と共に悲しい我が子の野辺の送りをするのでした。（文楽鑑賞教室・解説本より）



参加者・一般：猪子修身夫妻・梶山政彦・後藤由利子・古丸勇・末広和子・武田雄二・西尾千代和・西尾昭子・西野晃・西野順子・菱川義御夫妻・吉田吉之御夫妻
塾生：秋山建人・石見哲子・大森史子・北原祥三・杉山英三・中山恵三・林紀公子・原季美子・原田彰子・藤田艶・藤戸稔也・堀内紀江・森川千世子・山本たかし・山本ゆき 受付：大森史子・森川千世子（敬称略・アイエト）

順)